

小学校外国語活動における絵本の活用 —オノマトペを使った体験的理解—

木 原 美樹子

Suitable Picture Books for Elementary School English Classes: Onomatopoeic Expressions and Experiential Understanding

Minako Kihara

(2019年11月27日受理)

1. はじめに

2017(平成29)年に告示された小学校学習指導要領により、高学年で必修とされていた外国語活動が中学年で必修化、高学年で外国語が教科化される。中学年で外国語活動必修化にあたり、発達段階に合わせた内容が検討され、教材として本格的に絵本が導入されることとなった。文部科学省により補助教材として英語絵本2冊(*In the Autumn Forest*と*Good Morning*)とそのデジタル教材が作成され、中学年の共通教材『Let's Try! 1』『Let's Try! 2』の最後の単元は、それらの絵本を取り込んだ内容となっている。学習指導要領改訂に合わせて作成された指導者用『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』でも、歌・チャンツの活用と並んで、絵本の活用に紙面が割かれている。外国語教育において絵本が有効であることを示す研究はこれまで数多くなされており、日本の小学校外国語教育においても低学年から高学年まで、絵本活用の効果を検証した実践研究がある(畑江(2012); 又野(2013; 2014); 吉村ら(2017)他)。

今回の学習指導要領改訂について、文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編』(以下、『解説』)では、前回の学習指導要領改訂による成果と課題を踏まえ、次のように述べられている。

小学校中学年から外国語活動を導入し、「聞くこと」、「話すこと」を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達の段階に応じて段階的に文字を「読むこと」、「書くこと」を加えて総合的・系統的

に扱う教科学習を行うとともに、中学校への接続を図ることを重視することとしている。(7)

中学年の外国語活動では「聞くこと」「話すこと」を中心とした活動を行い、高学年の外国語で「読むこと」「書くこと」が加わる。中学年において外国語に慣れ親しみ、聞いて分かる体験を行う際に絵本を活用することは効果的であると考えられる。拙論(2018a; 2018b)ではテキストと挿絵の対応、歌・リズム・押韻という観点から、教材として適していると思われる英語絵本を取り上げた。本稿では外国語活動におけるオノマトペと英語絵本の活用について考察する。オノマトペは、新学習指導要領における外国語活動の目標のうち、「知識及び技能」に関する以下の目標に向けた活動の言語材料として、適していると考えられる。

外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。

この目標では体験を通して言語や文化について理解を深めること、「気付き」と「慣れ親しみ」から始めることが示されている。これに関して『解説』では、以下のよう

に説明されている。体験的に理解を深めることで、言葉の大切さや豊かさ等に気付いたり、言語に対する興味関心を高めたり、これらを尊重する態度を身に付けたりすることは、国語科の学習にも資するものと考えられる。(13-14)

外国語活動における体験的な理解が、より大きな枠組みでことばの学習につながり、延いては「国語科の学習」にも役立つということである¹。恣意性は人間の言語についての基本概念であるが、オノマトペは例外である。語の音と意味に、ある種の必然性が存在し、感覚的に表現し理解することばである。オノマトペについて谷川俊太郎はインタビューに答える中で、次のように述べている。

いわゆるオノマトペとか喃語的なことばは、ほとんどノンセンスですね。意味がない。だけどそれはことばを習得する上でも、あるいはことばの豊かなものの一部分としてもとても大事だと。…（中略）…オノマトペ的なもの、あるいはノンセンスなものは、なんか意味よりも、実物の実態の肌触りみたいなものをそこで生んでくれるという。そういう考え方があります。（谷川ら（2014：8-9））

オノマトペは言語習得の上でも、ことばの豊かさという点でも重要であり、その理解は直接的に肌で感じるような感覚があるということである。まだことばがよく理解できない幼い子供も、オノマトペを聞くと、直接的・感覚的にその意味を理解する。児童が英語オノマトペに触れ、時には日本語オノマトペと比較することが、ことばへの興味・関心を広げることにつながると思われる。

以下、オノマトペに注目し英語絵本の活用について考察する。その中でオノマトペが言語の音声の違いに関する気づきを促す題材として適していることを示す。さらに教材として優れていると思われる英語絵本を取り上げながら、使用されているオノマトペの特徴と指導上の留意点について述べる。

2. オノマトペ

本稿ではオノマトペを、擬音語と擬態語の総称として用いる²。擬音語とは「わんわん」等動物の鳴き声、「わあわあ」等人間の声、「どんどん」等の物音、等を真似て作られたことばであり、擬態語とは音ではなく事物の状態を象徴的に表していることばである。山口（2003：1）は日本語について擬音語を「現実の世界の物音や声を私たちの発音で写しとった言葉」、擬態語を「現実世界の状態を私たちの発音でいかにもそれらしく写しとった言葉」と表している。ここで「私たちの発音で」という部分が、同じ音を聞いているはずであるのに、言語によってそれを表現することばが違ふことを捉えている。オノマトペは、言語の音を使った感覚的なことばであり、臨場感を持って音や事物の状態を描写する

ことができる。

日本語にはオノマトペが非常に豊富であると一般的に言われており、山口（2003：1）も「欧米語や中国語の3倍から5倍も存在」し、オノマトペは「日本語を特色づける言葉」と述べている。無意識的に使っている便利なことばであるが、国語辞典に掲載されていないものも多く、日本語を学習する外国人には習得が難しいとも言われている。小倉（2016）は、オノマトペについて日本語と英語の比較対照を行っている。その中で宮沢賢治の作品の英語訳で知られるパルバース（2014）の「英語にもまた、日本語に負けないぐらい豊かな擬声語や擬態語などがあります。」（101）という主張を引用し、一見相反する主張がどのような事実起因しているのかを考察している。ここでその議論の詳細には触れないが、山口とパルバースの一見相反する主張には、日本語と英語の文法体系の違いが関係しているようである。山口は日本語のオノマトペが数量的に3倍から5倍あると言っているが、英語のオノマトペは判別が困難であり、英語の中にいったいどれだけのオノマトペがあるかは実際には見方次第とも言えるところがある。パルバースがオノマトペと捉えている語、例えば slide, slick, glitter などは、*Oxford Dictionary of English*（以下 ODE）ではオノマトペであるという記載がない。語源的にしっかりした証拠がなければ、辞書には記載されないのである。

日本語オノマトペは動詞を修飾する副詞として使われ、形からオノマトペであることがわかりやすい。例えば様々な笑い方で笑うことを、一般的な動詞「笑う」の前に「くすくす」「げらげら」等というオノマトペを付けて表現することができる。副詞として動詞を修飾する他に「～に」や「～と」の形や「～する」の形で状態を表現することができる。例えば「ぴかぴかに磨く」「ぼつんと立っている」等と言うことができるし、「ばたばたする」等と言うこともできる。日本語オノマトペは、形態的・文法的に判別がしやすいこともあり、数が多いことが認識されやすいのである。それに対して英語オノマトペは動詞一語であることが多い。英語で「くすくす笑う」は giggle, 「げらげら笑う」は guffaw という一語の動詞で表現することができる。giggle や guffaw は ODE で語源的にオノマトペであることが記されているが、上述のように、オノマトペという記載がないオノマトペと考えられる表現もある³。英語オノマトペはオノマトペとして認識されていないものが多いため、数が少ないと判断されているところがあるようである。英語オノマトペは、数こそ少ないと考えられているが、実際に効果的に使用された場合、そのダイナミックな描写は日本語では同様の表現ができないくらいの効果を持って

いることがある。例えば、splash という動詞は、水が音を立てて飛び散る様子をその音とともに一語で表現する。後述する英語絵本の中に splashing in the deepest puddle he could find という表現が使われており、ダイナミックに水たまりの水が飛び散る音や状態を表している。日本語で同様に表現しようとすれば「水たまりの水をバチャバチャと飛ばしながら」等となるであろう。英語では splash 一語で動作と状態を表現でき、より躍動感がある。日本語では動詞にオノマトペを付けて表現する。

3. 動物の鳴き声オノマトペと英語絵本の活用

3.1 大津・浦谷・齋藤編（2019）の学習活動案におけるオノマトペ

大津・浦谷・齋藤編（2019）で末岡は、日本語オノマトペについての学習を英語オノマトペの学習につなぎ、それらの違いに気付く活動を提案している。母語の理解を外国語学習に生かし、外国語の理解を母語の発達に生かすことについて、大津・浦谷・齋藤編（2019）の冒頭で大津が以下のように述べている。

子どもたちには、まず、ことばは人間だけに与えられた宝物であることを認識して欲しい。その上で、その力を十分に発揮すべく、直感が利く母語について、その仕組みと働きについての理解を深めて欲しい。つぎに、その理解をもとに母語以外の言語（外国語）について学んで欲しい。外国語に対する理解はことばの楽しさ、豊かさ、怖さを改めて感じるきっかけとなると同時に、母語の理解をより深め、母語の効果的な運用を可能にする。

「直感が利く母語」と関連づけた外国語学習が、ことばの力を育みさらに母語理解・運用にも効果があるとしている。同書でこのことを基本理念とした様々な教材、教案が掲載されている中で、末岡はオノマトペを取り上げ小学校における学習活動と授業の展開を提案している。1時間授業の目標として次の3点を上げている。

- ①言葉の「音」としてのおもしろさに気づく。
- ②ことばにおけるオノマトペの役割に気づく。
- ③同じ音でも言語によってとらえ方が異なることに気づく。

（末岡（2019：95））

授業展開としては、日本語オノマトペについて活動を通してよく考えた上で、英語の動物の鳴き声オノマトペに

触れ、その違いを捉えるという流れである。英語オノマトペについては授業の最後10分に動物の鳴き声だけを取り上げて、日本語との違いに気づく活動を設定している。用意されているワークシートでは以下の動物の鳴き声を上げ、何の動物の鳴き声かを記入するようになっている。

meow, bowwow, moo, baa, oink, neigh, quack, squeak, chirp, cock-a doodle-doo（102）

上の鳴き声に対応する動物を順に上げると、以下のようになる。

ネコ、イヌ、ウシ、ヒツジ、ブタ、ウマ、アヒル、ネズミ、トリ、オンドリ（262）

鳴き声をことばで表現しやすい動物が取り上げられている。児童が普段特に意識せずに使っている日本語の動物の鳴き声と英語の動物の鳴き声を比較することになる。同じような鳴き声を聞いているのに、英語では一見全く違うことばで表現するというのは児童にとっても不思議で興味を惹きつけられるものと思われる。上の授業展開では英語の動物の鳴き声を聞いて、どの動物か考える活動が設定されているが、絵本を使って英語の動物の鳴き声に出会わせることも可能である。1で挙げた学習指導要領の目標に示されているように「言語や文化について体験的に理解を深め」る活動として、絵本を使うことでより自然な形で、英語の動物の鳴き声オノマトペを児童に聞かせることができる。

3.2 動物の鳴き声オノマトペを扱った英語絵本の活用

Sandra Boynton の絵本 *Moo, Baa, La La La* では、動物の絵に動物名と鳴き声が同様の形式の文で提示されている。例えばウシは“A cow says MOO.”⁴である。上掲の末岡（2019）の動物鳴き声リストにはない、「歌うブタ」（singing pig）、サイ（rhynoceros）、子イヌがこの絵本には掲載されている。サイについては「サイは鼻を鳴らし、くんくんにおいを嗅ぎます」（Rhinoceroses snort and snuff.）と表現されている。使われている動詞 snort は snore（いびきをかく）という擬音語を語源としており、snuffはsniff（においを嗅ぐ）という擬音語と関連がある。3番目の動物「3匹の歌うブタ」は「LA LA LA と言います」（Three singing pigs say LA LA LA.）と書かれている。次の頁で、『「いや、いや！」あなたは言うでしょう。「それは違うよ。ブタは OINK と一日中言っているよ」と。』（“No, no!” you say, “that isn’t right. The pigs say OINK all day and night.”）と書かれている。

ユーモラスな挿絵にジョークも入って、楽しく動物の鳴き声を取り扱うことができる絵本である。登場する動物と鳴き声は以下の通りである⁵。

cow	MOO
sheep	BAA
three singing pigs	LA LA LA
Rhinoceros	SNORT and SNUFF
little dog	RUFF RUFF RUFF
dog	BOW WOW WOW
cat and kitten	MEOW
duck	QUACK
horse	NEIGH

この絵本で取り上げられている英語オノマトペを、実際の動物の鳴き声と比較したり、日本語のオノマトペと比較したりすることができる。子イヌとイヌの鳴き声の違いについて取り上げることで、英語でも日本語でも、オノマトペがうまく実際の音声を区別して捉えていることに気付かせることが可能である。

上記絵本は、各動物とその鳴き声を単純に提示する形式であったが、Jules Feiffer の *Bark, George!* は、奇想天外な物語の中に動物の鳴き声オノマトペを使用している。オノマトペがストーリーに取り込まれており、高学年の児童にも対応できる絵本である⁶。絵本名にある子イヌのジョージ (George) と母イヌに加えて、ネコ、アヒル、ブタ、ウシが登場する。それぞれの鳴き声が物語進行において大きな意味を持っている。絵本のタイトル “Bark, George!” は、子イヌに吠えることを教えている母イヌの声かけである。母イヌはジョージがイヌらしく吠えず、“Meow” “Quack-quack” “Oink” “Moo” と鳴くことを心配し、獣医に連れて行く。ジョージの口から鳴き声の主であるネコ、アヒル、ブタ、ウシが救出される。最終的に子イヌらしく “arf” と吠えたことで母イヌは大喜びするが、物語の最後に驚くべき結末が待っている。帰り道に人混みを通り抜けたジョージはなんと “Hello!” と言うのである。動物 (ネコ、アヒル、ブタ、ウシ) の鳴き声が物語理解の鍵となっている。絵本のストーリーを追いながら、英語の動物の鳴き声を聞いて日本語との表現の違いを体験的に理解することが可能である。

オノマトペを取り扱う際に、児童にとってわかりやすい動物の鳴き声のみを取り上げることもできるが、身の回りの音や事物の様子を表す英語オノマトペに範囲を広げて、英語や日本語のことばへの関心を養いたい。動物の鳴き声はオノマトペの中で一部に過ぎない。小学校外国語活動で英語オノマトペを扱う場合、それらの表現を

覚えることが第一の目的ではない。入門期の外国語学習においては音声、まず「聞くこと」が重要である。絵本の読み聞かせにより、児童に英語オノマトペの音の響きを体験させたい。英語の音を聞いて、日本語との相違あるいは類似性を感じることににより、ことばの音に対する感性が涵養される。単純にことばの音の面白さを味わう目的で行う活動もあってよいと思われる。

次に、市販の英語絵本の中から、動物の鳴き声以外の英語オノマトペを含む絵本を取り上げ考察する。オノマトペが含まれる英語絵本を使った読み聞かせは、児童のことばに関する興味・関心を広げるものとなると考えられる。

4. 英語絵本と使用されているオノマトペ

Annie Kubler の *The Wheels on the Bus* は唄を基にした絵本であり、わかりやすいオノマトペが何度も繰り返されている。英文からオノマトペが使われている行を抜き出すと以下ようになる。

The wipers on the bus go Swish Swish Swish, Swish Swish Swish, Swish Swish Swish.

The horn on the bus goes Beep! Beep! Beep! Beep! Beep! Beep! Beep! Beep! Beep!

The parents on the bus go Chat Chat Chat, Chat Chat Chat, Chat Chat Chat.

The babies on the bus go “Wah Wah Wah, Wah Wah Wah, Wah Wah Wah.”

The people on the bus go “Ssh Ssh Ssh, Ssh Ssh Ssh, Ssh Ssh Ssh.”

ワイパーが動く様子、クラクションの音、バスに乗っている大人たちがしゃべる様子、バスに乗っている赤ちゃんの鳴き声、赤ちゃんをなだめる声である。この絵本は古い童謡を元にしており、絵を見て歌いながら、英語オノマトペの音を楽しむことができる。歌にジェスチャーも加えることで、理解が容易となると思われる。

Dr. Seuss の *Mr. Brown Can Moo! Can you?* にはたくさんのおノマトペが使われている。音まねが得意なブラウンおじさんが登場し、「ブラウンおじさんはウシの真似ができるよ。MOO と鳴けるけど、君はできる？」(He can go like a cow. He can go MOO MOO. Mr. Brown can do it. How about you?) と、実際に児童に発話呼びかける仕掛けとなっている。ウシ、オンドリ、フクロウは、一般的によく知られた鳴き声オノマトペとともに取り上げられているが、少々変わったオノマトペとして「チョウのささやき」がある。

Mr. Brown can WHISPER WHISPER ... very soft very high ... like the soft, soft whisper of a butterfly. Maybe YOU can too. I think you ought to try. (Dr. Seuss 2018 : 14-5)

whisper という動詞は語源的に擬音語であり、『ジーニアス英和大辞典』ではその意味が「＜人が＞[…に] ささやく」や「＜風・木の葉・流れなどが＞さわさわ音をたてる」と説明されている。「さわさわ」という日本語オノマトペは、滑らかなイメージを持つ語である(田守 2002 : 151-4)。チョウが舞う様子を表す擬態語として一般的に「ひらひら」が使われるが、チョウという名前は本来「てふてふ」というオノマトペから来ており、風に乗って軽く舞う様子が表現されている。英語の場合も日本語同様、風を連想させる音が使用されており、言語の違いを超えた普遍的感觉があると言える。読み聞かせの際はチョウが舞う様子をイメージしてささやくように“whisper whisper”と言う必要がある。他にも動物に関する音として、以下のものが上げられている。

buzz	ミツバチが飛ぶ音
klopp	馬の足音
slurp	大きなネコが水を飲む音
grum	カバがガムを噛む音
pip	金魚がキスをする音

buzz と klopp (= clod) は擬音語として、どの英和・英英辞典にも記載されている。馬に関するオノマトペとしては、鳴き声は neigh, 走る音は clod (-clod), clip-clod がよく知られている。その他の slurp, grum, pip は作者がイメージで選んだと思われる表現である。slurp は音をたてて食べたり飲んだりする動作やその時の音を表す語であり、例えば、西洋では食事のマナーとしてタブーである、日本人がそばやうどんなどをすする様子を表すにはこの単語が用いられる。カバがガムを噛むことや金魚のキスは題材として面白い。grum は『ジーニアス英和大辞典』で「むっとりした、不機嫌な」という意味の形容詞として掲載されているが、カバやガムを噛むことと関連はない⁷。pip は時報のような短く高い音を表す語である。このように絵本で使われている非典型的な音を表すことばも実際に口に出して言ってみて、その音が表現できているかを考え、音をどうことばで表現するかという興味につなげたい。

他にも身の回りの生活音として、以下の音を取り上げられている。pop (コルクを抜く音), eek (靴が床を擦る音), dibble dopp (雨音), choo-choo (蒸気機関車の

音), blurp (ホルンの音), tick tock (置き時計の音), knock (ドアをノックする音), sizzle (フライパンで目玉焼きが焼ける音), boom (雷の音), splatt (稲光) である。これらのことばがどのように絵本の絵が示す音を表しているのか、口に出して感覚的に捉える活動はことばに対する感性を磨くのに効果的であろう。実際の音にできるだけ近づけて真似をして言う必要がある。例えば上の choo-choo という蒸気機関車の音は、「チュウチュウ」と言っても何のことか分からないが、実際の音をイメージして日本語の蒸気機関車のオノマトペ「シュッシュ」に近い発音で言うと児童も納得がいくと思われる。

Joy Cowley の *Mrs. Wishy-Washy* にも動物(ウシ, ブタ, アヒル)が登場する。「Wishy-Washy おばさん」と泥んこになった動物たちの話である。たらいに入れた動物をおばさんが洗っている場面は、次のような英語で表現されている。

In went the cow, wishy-washy, wishy-washy.
In went the pig, wishy-washy, wishy-washy.
In went the duck, wishy-washy, wishy-washy.

倒置文を使い、動物がたらいに入るとすぐにおばさんに洗われる様子が臨場感をもって表現されている。動きが感じられる調子のよい繰り返し表現となっており、「おばさんが動物を洗った」という英語表現はないが、washy に wash (洗う) が含まれており、wishy-washy の繰り返しは日本語の「ごしごし」と音が類似していることは興味深い。本来 wishy-washy という英語表現は人の優柔不断さ、消極性を表すことばである。“Mrs. Wishy-Washy” は、日本語で表現すれば、「もじもじおばさん」とでも言えそうであるが、絵本に描かれているおばさんは、見るからにたくましく、名前とは正反対で動物たちを強引にごしごし洗う行動力のあるおばさんであるところがユーモラスである。おばさんにきれいに洗ってもらった(というより無理矢理洗われた)動物たちは、おばさんが家に戻っていくのを見届けるとどこかへ走って行き、また泥んこになる結末も面白い。

Michael Rosen 再話の *We're Going on a Bear Hunt* にも特徴的な興味深いオノマトペが使われている。5人兄弟がクマ狩に行く途中で何度も行く手を阻むものにぶつか。それらの障害物を乗り越えていく様子の描写に、オノマトペが使用されている。使用されているオノマトペは、表1の通りである。オノマトペは各場面でも3回ずつ繰り返される。①②③は音が一部異なる反復形で、3回繰り返されることにより、さらに継続的な動きが感じられるものとなっている。①から順に場面とオノマトペ

を見ていく。

表1 場面とオノマトペ

	場面	オノマトペ
①	long wavy grass	swishy swashy
②	a deep cold river	splash splosh
③	thick oozy mud	squelch squerch
④	a big dark forest	stumble trip
⑤	a swirling whirling snowstorm	hoooo woooo
⑥	a narrow gloomy cave	tiptoe

①の長く波のように茂った草 (long wavy grass) を通り抜ける時の音 “swishy swashy” の swish には「<むちなどが> (鋭く) ヒュッと音を立てて動く, (絹などが) さらさら音を立てて動く」という意味がある。swishy swashy は音が一部異なる反復形である⁸。田守 (2002: 133-178) は「ある音声がかたまそれを含む特定の語の固有の意味とは別の, 象徴的な意味」を表すことがあると述べ, その「音象徴」という概念を用いて, 日本語と英語の共通点について述べている。英語特有の音象徴の例として, sw- は「前後左右の動き」を表していると言う。英語の sw- に対応する日本語のオノマトペとして「さわさわ」(sawa-sawa) と「そわそわ」(sowa-sowa) があり共通性が見られる。「さわさわ」は「草や木の葉が風で揺れ, 互いにふれあう様子」を表しており, その動きは横揺れであると言う。3回繰り返される “swishy swashy” を聞くと, 草をかき分けて進んでいく様子が目に浮かぶようである⁹。田守はまた, 子音 [s] が「滑らかさ」という概念と関連していることが多いと指摘している。[s] 音の特徴として, 連続音性と呼ばれる「空気が口から出てくるのを完全に阻害するような閉鎖がない」(154) ためと説明している。日本語のサ行, 「さ」や「す」で始まるオノマトペの例として, 「さらさら」「さくさく」, 「すべすべ」「するする」等があり, 「滑らかさ」と関連していると考えられる。オノマトペに関して言語による違いだけでなく, 共通性や言語の普遍性について, 指導者も知っておきたい。

②の障害物は深くて冷たい川である。川に入り, “splash, splosh” という音を立てて通り抜ける。田守 (2002: 157) によると英語で水しぶきの音を表す語は日本語ほど多くなく, 以下のような語に限られる。

splash, splosh, slosh, sploosh, splish-splash, sprinkle, spray, spatter, slop, lap, slush, plunge

これらは多少の例外はあるが [s] 音を含み, sh の [ʃ]

音も多い。[s] [ʃ], ge の [dʒ] 音は粗擦音と呼ばれる音である。またほとんどの語が [p] 音を含んでいる。

[p] 音は両唇閉鎖音で上下の唇を閉じて息を止め, 一気に息を吐き出すことで出る音である。日本語で水しぶきを表す表現も「ぱちゃっ」「びしゃっ」「じゃぶじゃぶ」のように英語と同様 [p] [b] [ʃ] [dʒ] 音を含んでいる。「物体が水面に打ち当たるときに生ずる音」と「水しぶきがはじけて飛び散る音」を象徴しているということである。このような英語オノマトペは, 日本語母語話者に感覚的に理解しやすいものであると思われる。

③ではぬかるみを通り抜ける様子が “squelch squerch” と表現されている。音が一部異なる反復形である。squelch は「液体や泥に圧力がかかって出る軽く吸い付くような音」(a soft sucking sound made when pressure is applied to liquid or mud) (OED) を表している。squelch の英和辞書での定義に見られる日本語オノマトペには, ガボガボ, ビチャビチャ, グチャグチャ等がある。この絵本の日本語版の山口訳では「ペタペタペタ」となっており, 英語版よりも少し軽いぬかるみのイメージとなっている。

④は広くて暗い森の中を歩く様子を stumble「つまづき, よろめき」と trip「軽快な足どり」で表現している。“stumble trip” の繰り返しからは, 歩くリズムが感じられる。⑤は障害となる吹雪 (snowstorm) の形容に “swirling whirling” という表現が用いられている。「渦を巻く」というほぼ同様の意味を持ち, 音の響きが似た語を2つ重ねている。“hoooo woooo” という風の音も感覚的にわかりやすい。⑥は狭くて暗い洞窟を tiptoe「つま先で歩く」という語の繰り返しにより, そうっと歩く様子が表現されている。④の表現と比較して見ると音の響きの違いが明らかである。

この絵本で使われているオノマトペは非常に特徴的で, それが極めて効果的に使用されている。音が一部異なる反復形が使われており, 3回繰り返されることで前進する動きも感じられるようになっている。児童が読み手のジェスチャーやことばの抑揚, 挿絵などの助けも借りて, 場面状況を理解できれば, 障害をどのようにやり過ごして通り抜けるのか, オノマトペの音の響きを感じながら思い描くことができる。

M. Christina Butler の *One Rainy Day* は, 森の動物の物語でハリネズミやモグラ, ネズミ, キツネ, アナグマが登場し, たくさんのオノマトペが使われている。まず, ハリネズミが “Pitter-pat! Pitter-patter, pitter-pat!” という雨音で目を覚ます。待ちに待った雨が降り, 新しい雨具 (レインコート, 帽子, 長靴, 傘) を身に付け喜んで外に出たハリネズミは “Pop!” と傘を開く。ストーリーの中に, オノマトペが効果的に用いられている。雨

で家が水浸しになったモグラが助けを求めてきたり、ネズミが溺れそうだとキツネが助けを求めてきたりするのを、何とか助け出し、ハッピーエンドとなる。絵本の中で使われているオノマトペと考えられる表現とそれが表す音や様子は、表2①－⑨の通りである¹⁰。

表2 オノマトペとそれが表す音や様子

	オノマトペ	表す音や様子
①	Pitter-pat! Pitter-patter, pitter-pat!	雨音
②	wriggle	ハリネズミが靴を履く様子
③	pop!	傘を開く音
④	splash/ SPLASH!	水たまりを進む様子／傘が川に落ちる音
⑤	wobble/ wibble	ハリネズミとモグラがよろける様子
⑥	BUMP!	ハリネズミとモグラが倒れる音
⑦	splutter	モグラが川に落ちて助けを求める様子
⑧	swing	草にしがみついたネズミが揺れる様子
⑨	drip	雨漏りで水が落ちる時の様子

①の pitter-patter については、見出し語 pit-a-pat の形で擬音語として辞書に掲載されている。日本語の「パタパタ」「パラパラ」に近く、足音や雨音を表す。②は wriggle は「体をくねらせる」という意味で、この場面ではハリネズミが新しい長靴をもぞもぞ身に付ける様子を表すのに用いられている。辞書にオノマトペとして記載されていないが、呂（2004）の「英語のオノマトペらしい接辞」リストに -iggle があり、例として wriggle も giggle や sniggle 等とともに挙げられている。③④⑥は擬音語としてよく知られた表現である。⑤の wobble は田守・スコウラップ（1988）で擬態語として取り上げられている。wibble は wobble の異形である。⑦の splutter は *Oxford Advanced Learners Dictionary (OALD)* で “to speak quickly and with difficulty, making soft spitting sounds, because you are angry or embarrassed” と説明されている。モグラが川で、慌てて唾を飛ばしながら助けを求め叫んでいる様子を表すのに用いられている。splatter との連想があると考えられる語であり、*ODE* でオノマトペと表記されている。⑧は辞書にオノマトペの記載はないが、田守（2002）でもオノマトペとして扱われ、呂（2004）の「英語のオノマトペらしい接辞」リストに挙げられている。⑨は辞書にオノマトペの記載はないが、*OALD* には「連続的に液体の小さな粒が落ちる音や落ちる様子」(the sound or action of small drops of liquid falling continuously) とあり、音と関係する語であると言える。

以上、オノマトペが効果的に用いられている絵本を取り上げ、使われているオノマトペの音と意味について考察してきた。指導者は読み聞かせをする前に、絵本のオノマトペの表す音や状態をしっかり捉え、それに基づいて読み聞かせの仕方を工夫する必要がある。

5. 結 び

本稿では、小学校外国語活動における絵本の活用について、オノマトペに注目して見てきた。外国語活動が中学年で実施されるにあたり、絵本の活用は益々推奨されている。小学校学習指導要領における外国語活動の目標には、日本語と外国語との音声の違いに関する気づきや外国語の音声への慣れ親しみが掲げられているが、それを促す題材として、オノマトペは非常に適していると思われる。他教科と関連付けた指導という点でも、ことばの学習という広い意味で、国語科の学習に関連付けることが可能である。身の回りの音や事物の状態を外国語ではどのように表現するのかということ、また日本語との相違や共通性について考えることは児童にとっても興味深いと思われる。

3で見たとおり、動物の鳴き声に関する英語オノマトペは、児童にとって理解しやすい。英語絵本の読み聞かせにより、英語の音声の特徴を理屈抜きに体験的に感じ取ることができると思われる。日本語と英語の音の違いを知識として提示するのではなく、絵本の絵やストーリーとともに取り上げることににより、児童の記憶にも残りやすくなる。児童には動物の鳴き声に留まらず、様々な音や状態を表現するオノマトペを聞かせたい。特に4で取り上げた英語絵本は、楽しいストーリーの中にオノマトペが使われている。grum のように作者の感性で使われている語も含まれており、オノマトペの創造的使用の可能性を示している。

指導者が英語オノマトペを取り扱う際には、どのようにそれが表す音や状態と関係しているのかを捉え、それを意識して発音する必要がある。可能な限り実際の音に近づけたり、ジェスチャーを交えて示したりして、児童が英語オノマトペとそれが表す音や状態との繋がりを感覚的に感じられるようにすることが大切である。そうすればより効果的に児童に英語オノマトペを聞かせることができ、英語の音の感覚とことばの面白さや豊かさに気付かせ、児童のことばに対する興味・関心を高めることにつながると思われる。

註

1 鳥飼（2015）は英語教育と国語教育との連携の必要性に

ついて述べる中で、英語教育において「母語としての日本語が英語学習の基盤となる」ことを示す先行研究に言及している。「相互依存説」(interdependence principle/ hypothesis)と呼ばれる Cummins & Swain (1986) や Cummins (2000) の研究成果に触れ、第二言語の学習における母語(第一言語)の使用が、どちらの言語にもよい影響を与え、どちらの言語の発達も促すと述べている。

- 2 英語の onomatopoeia は擬音語のみを指しており、擬態語は mimetic word である。本稿で言うオノマトペに最も近い英語は imitative word であると思われる。
- 3 ODE では imitative という表記を用いて、オノマトペであることを示している。
- 4 この絵本で動物の鳴き声は全て大文字で表記されている。以下、本稿で取り上げる絵本からの引用は、大文字と小文字を絵本の表記通りとする。
- 5 この絵本の最後のページは「今(動物たちは)静かになりました。あなたは何と言いますか。」(It's quiet now. What do you say?) と、児童に問いかける文となっている。正答のない面白い問いとなっている。
- 6 吉村ら(2017)の授業実践報告では読み聞かせをした15冊の絵本の中で、児童の反応が特によかった絵本として挙げられている。
- 7 grum という語は ODE や OALD には掲載されていないが、*Oxford English Dictionary (OED)* では、おそらく grim, glum, gruff, grumble のような語の混成であること、意味としては「人、そして人が話す時の顔つきや話し方について」(Of persons, and their aspect and mode of speaking)「陰鬱な、気むずかしい、無愛想な」(gloomy, morose, surly)と説明されている。
- 8 日本語と違い、英語には同じ要素の繰り返しよりも、このような反復形が多い。
- 9 この絵本の日本語版では "swishy swashy" が「カサカサカサ」と訳されている。草が軽く擦れ合う状態を考えてのことと思われる。しかし「カサカサカサ」には原語にある、行く手を阻む丈の高い草をかき分けながら進む様子を表す力強さはない。
- 10 オノマトペとして辞書に記載されていない語についても、先行研究に基づきオノマトペとして取り上げている。

参考文献

- 大津由紀雄・浦谷淳子・齋藤菊枝編(2019)『日本語からはじめる小学校英語』開拓社
- 小倉慶郎(2016)「日英オノマトペの考察―日英擬音語・擬態語の全体像を概観する―」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』14, 23-33.
- 木原美樹子(2018a)「小学校外国語活動においてどのような絵本が教材として適しているか―「聞くこと」から「話すこと」へ―」『中村学園大学発達支援センター研究紀要』第9号, 1-6.
- 木原美樹子(2018b)「小学校英語教育における英語絵本の活用について―絵本の選び方を中心に―」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第50号, 55-62.
- 末岡敏明(2019)「Unit 2 Lesson 10 オノマトペ」『日本語からはじめる小学校英語』大津由紀雄・浦谷淳子・齋藤菊枝編, pp. 95-102.
- 谷川俊太郎, 中地雅之, 塩原麻里(2014)「谷川俊太郎氏に聞く 詩はなくても生きていけるけれども音楽はなくちゃ生きていけない」『音楽教育実践ジャーナル』12巻1号, 6-25.
- 田守育啓(2002)『オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ(1999)『オノマトペ―形態と意味―』くろしお出版
- 鳥飼久美子(2015)「2014年度活動：英語教育と国語教育との連携」『研究報告』No.83, 5-9.
- 畑江美佳(2012)「小学校外国語活動における「読む」ことへの第一歩としての絵本の活用」『融合文化研究』第18号, 2-13.
- パルパース, ロジャー(2014)『驚くべき日本語』集英社
- 又野陽子(2013)「小中連携を視野に入れた小学校外国語活動における英語の絵本の活用方法―絵本 *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?* を教材として―」『中国地区英語教育学会研究紀要』No.43, pp. 41-50.
- 又野陽子(2014)「小中連携を視野に入れた小学校外国語活動における英語の絵本の活用方法―絵本 *The Very Hungry Caterpillar* を教材として―」『中国地区英語教育学会研究紀要』No.44, pp. 81-90.
- 文部科学省(2017)『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』
- 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説外国語活動・外国語編』開隆堂
- 山口仲美編(2003)『暮らしのことは擬音・擬態語辞典』講談社
- 吉村美幸・吉田朋世・今井信義・福島安希子(2017)「小学校における英語絵本の読み聞かせの研究」『福井県教育研究所研究紀要』第122号.
- 呂佳蓉(2004)「英語のオノマトペの象徴メカニズム」『言語科学論集』第10号, 99-116.
- 『ジーニアス英和大辞典』大修館, 2001年
- Oxford Advanced Learners Dictionary*, 8th ed. London: Oxford University Press, 2010.
- Oxford Dictionary of English*, Second Edition Revised. London: Oxford University Press, 2005.

Oxford English Dictionary, Second Edition on CD-ROM Version
4.0. Oxford University Press, 2009.

本文中に取り上げた絵本

Boynton, Sandra (2004) *Moo, Baa, La La La!*, New York:
Simon & Schuster Children's

Butler, M. Christina (2011) *One Rainy Day*, London: Little
Tiger Press.

Cowley, Joy (1997) *Mrs. Wishy-Washy*, Chicago: McGraw-Hill.

Dr. Seuss (2018) *Mr. Brown Can Moo! Can You?*, Big Cat
Edition, London: Collins

Feiffer, Jules (1999) *Bark, George!*, New York: Harper Collins.

Kubler, Annie (2003) *The Wheels on the Bus Go Round and
Round*, Swindon: Child's Play (International) Ltd.

Rosen, Michael (1995) *We're Going on a Bear Hunt*, London:
Candlewick.

ローゼン, マイケル (1991) 『きょうは みんなで クマがりだ』
山口文生訳 評論社